

アオスジアゲハは都市部に多い!? 小学生1万人調査で明らかに ～こども「いきいき」生き物調査2017 調査結果のお知らせ～

横浜市環境科学研究所では、H29（2017）年の夏休みに、市内の市立小学校341校の児童を対象に、家や学校の近くで見つけた生き物を報告してもらう市内全域調査を実施しました。189校、13,095人の児童から回答があり、調査結果がまとまりましたので、お知らせします。

青い模様が美しい南方系のチョウ、アオスジアゲハが市内東側の臨海都市部で多く確認されていること、市内でも多くの地域でホタルが見られ、全体として約4割の児童が「見かけた」と回答していることなど、生物多様性保全に資する貴重な情報を得ることができました。

1 事業名称

こども「いきいき」生き物調査 2017

2 目的

調査を通じて地域の自然や生き物への関心を高めてもらうとともに、生物多様性保全に資する基礎データを取得することを目的に実施しました。

3 調査方法

市内にある市立小学校341校の5年生30,504人（2017年5月1日現在）に調査票を配布し、過去1年間（2016年9月1日～2017年8月31日）に、「家や学校の近く」（＝学区内）で見つかったり、鳴き声を聞いたりした生き物について、○をつけてもらいました。

4 調査対象とした生き物

調査対象としたのは、次の9種類の生き物です。生き物の分類（同定）のしやすさに配慮しながら、市内の自然環境を特徴づけるもの、減少または増加傾向にあるものなどを選定しました。

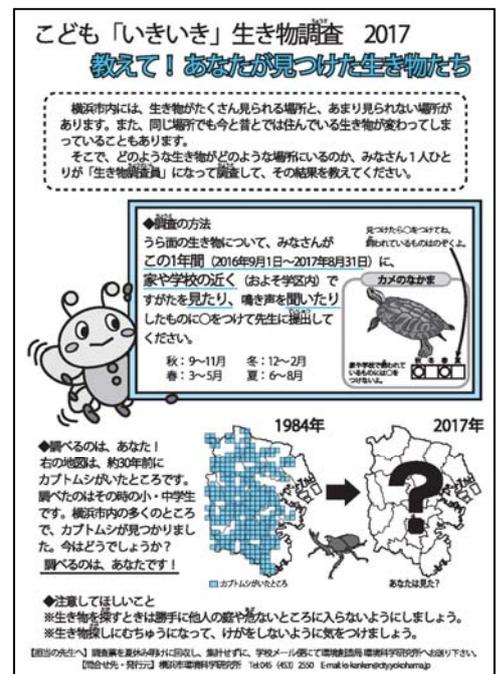
- ・ツバメの巣
- ・カブトムシ
- ・ススキ
- ・ヘビのなかま
- ・ホタルのなかま
- ・スズメ
- ・コウモリ
- ・アオスジアゲハ
- ・カメのなかま

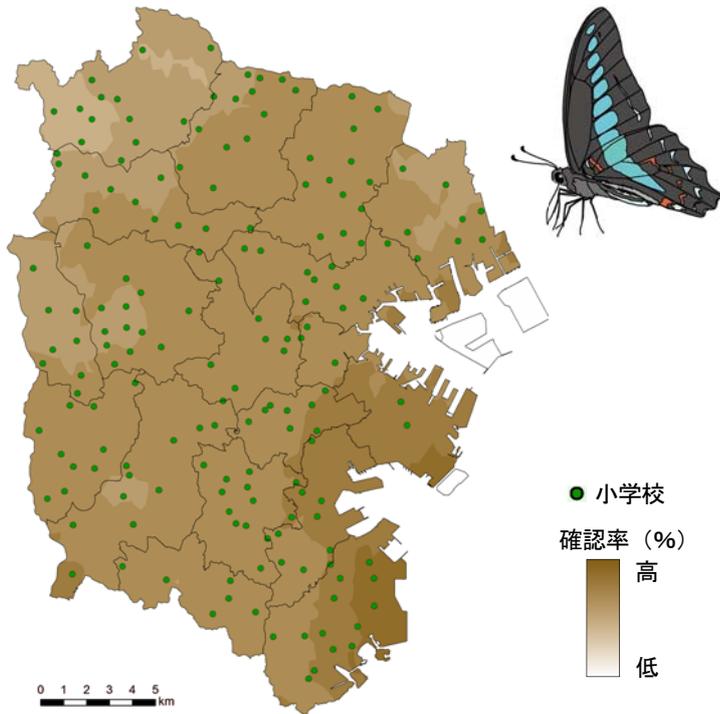
5 調査結果

学校ごとに、対象の生き物を見つけた割合（以下、確認率）を集計し、その情報をもとにGISソフトを用いて市内全域における確認率の高低を色の濃淡で示しました。※裏面に「アオスジアゲハ」、「ホタルのなかま」について調査結果をお知らせします。

調査は、毎年実施しており、今回で5年目になります。5年間毎年調査している「ツバメの巣」は市全体の確認率が77%前後で推移していました。また、2年に1度の頻度で調査している「カブトムシ」は70%前後で推移していました。毎年、1万人以上の児童が参加することにより、横浜の生物多様性を知る、非常に精度の高い調査結果が得られました。

※作図にあたっては、1校あたりの回答数が10人以上の172校のデータを使用しました。





注) 色の濃淡は、小学校ごとの確認率をもとに統計的に計算、作図したものです。一部のふ頭などは解析対象外としました。

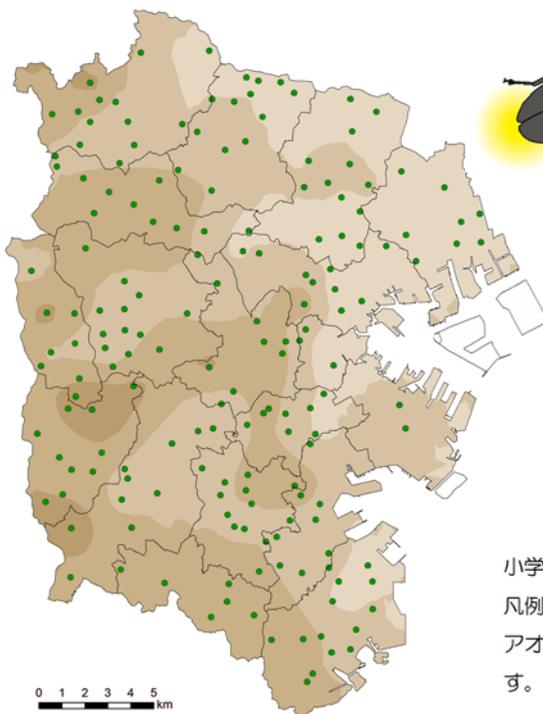
【アオスジアゲハ：市全体の確認率 63%】

学校ごとの確認率は 30%から 94%でした。樹木の上など、高い位置を高速で飛ぶこともありますが、はねの模様が目立つ、大きめのチョウであるため、確認率は比較的高めでした。

東側の臨海都市部で確認率が高かったのは、アオスジアゲハが、街なかに街路樹として植栽されることも多いクスノキやタブノキに産卵するためと考えられます。市内都市部においては最も多く見られるチョウの 1 種であり、全国的にも都市部での増加が指摘されています。

また、アオスジアゲハは本来、南方系のチョウであり、国内では現在、東北地方より南に分布し、北海道では見られません。市内では全域に見られますが、温暖化の進行などにより、今後、確認率が変化するかもしれません。

今後も定期的に調査を行うことにより、変化を追跡していきます。



小学校、確認率に関する凡例および注意事項は、アオスジアゲハと同じです。

【ホタルのなかま：市全体の確認率 37%】

学校ごとの確認率は 0%から 86%でした。学校のすぐそばでホタルを観察できるような地域もあり、確認率は地域によって大きくばらつきました。

市内には、数種類のホタルの仲間が生息していますが、調査結果は、夜間、成虫が比較的強く発光するゲンジボタル、ヘイケボタルのものと考えられます。

確認率は市内西側で高く、東側の臨海都市部で低い結果となりました。成虫の繁殖の障害となる人工的な明かりが少なく、河川源流域あるいは、水田のような止水域などの環境（谷戸環境）が維持されていることを示すと考えられます。ただし、確認率の濃淡はホタルの生息数、発生地規模だけでなく、保護活動の有無といった、地域での注目度にも影響を受けている可能性があります。

6 その他

結果の詳細は、横浜市環境科学研究所 Web ページをご覧ください。

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kankyo/mamoru/kenkyu/data/forest/ikiiki.html>

学校ごとの確認率は観察場所へのアクセスのしやすさなど、さまざまな要因により変動し、必ずしも生き物の生息密度を表すものではありません。調査は長期的な視点での解析・考察が重要であり、来年以降も対象とする生き物の種類を変えながら継続実施する予定です。

お問合せ先

環境創造局環境科学研究所長 武田 正善 Tel 045-453-2550